ISSN－0913－1906
関西大学博物館彙報
2021年９月30日　発行

阡陵

No. 83

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]

張り子の虎（内藤湖南の旧蔵品）

◉ 目　次 ◉

御田植祭りの人形 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・黒田　一充　2
レガリア「大刀契」について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三好　順子　6
これからの「公共」について―人文系私設図書館 Lucha Libro の活動から―
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・青木　真兵　8
九鬼隆一の「地方博物館設立ノ必要ナル理由」 ・・・・・・・・・・・・山口　卓也　10
関西大学博物館所蔵蓑虫山人由来の土偶 ・・・・・・・・・・・・・・・山下　大輔　12
東洋民俗博物館の建築 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・西田　貫人　14

関西大学博物館
〒564-8680　大阪府吹田市山手町３丁目３番35号
Tel. 06-6368-1171（直通）　Fax. 06-6388-9928
http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/

御田植祭りの人形

黒　田　一　充

年の初めに寺院のお堂や神社の境内で農作業を模擬的に行い、その年の稲の稔りや豊作を祈る芸能がある。古くは伊勢神宮の『皇太神宮儀式帳』（804年）で、２月初子日の神事に鍬で田を耕す所作をした記録があり、『皇太神宮年中行事』（1192年）でも、２月１日の神事に鍬で地面を打ち、桶に入れた小石をまき、藁を田に植える所作をしたことが記されている。

現代でも、田男（たおとこ）と仮面をつけた牛が登場し、田起こし（田打ち）や籾まき、田植えなどの一連の農作業の様子が祭りの中で演じられる。近畿地方などではおんだ（御田祭）、愛知県以東では田遊び、全国的には御田植祭（神事）とよばれ、その中に人形が登場する所がある。

大阪市平野区杭全（くまた）神社では、４月13日（もとは１月）に御田植神事が行われる。能の影響が強く、尉面（じょうめん）をつけた翁が登場し、地方（じかた）の謡（うたい）に合わせて田起こしから籾まきまでを演じる。その後、翁が「太郎坊、次郎坊」と呼んで扇で招くと、市松人形を背負った田男とふたりの早乙女が登場する。翁はその人形を抱いて三宝に盛った白蒸（しらむし）を箸でつまんで食べさせ、桶に向かって放尿をさせる（写真１・２）。再び人形を背負った田男と早乙女は、苗に見立てた松葉で田植えを行って儀礼を終える。

明治42年（1909）２月３日、４日付『大阪朝日新聞』の「福の種子（たね）」の記事には、人形（太郎坊）を抱き取った翁が三宝に載せた米を南天の箸で掬（すく）って食べさせる真似をし、再び田男に背負わせて田植えに移っており、今とは所作が異なっていたようである。

静岡県浜名湖北部の集落では、正月初めに村のお堂でその年の豊作を祈る儀礼（修正会）を行う。堂内で様々な芸能が奉納され、「遠江のひよんどりとおくない」として文化財に指定されている。その中に田遊びが含まれ、人形が登場する。

浜松市天竜区懐山（ふところやま）のおくないは、泰蔵院で剣の舞や鬼の舞、仏の舞など20をこえる演目が奉納される。参拝者たちも参加する田植の演目があり、その直後にネンネコーとよぶ人形を背負って子守が登場する。人形は布を丸めたもので、御飯に味噌汁をかけた汁掛け飯を食べさせる所作をする（写真３）。この汁掛け飯は、儀礼の終了後、参拝者にも振る舞われる。

同市北区引佐町川名の福満寺薬師堂でも、芸能の最後に田遊びの演目があり、水口打ちから稲刈りまでの農作業を演じる。その中で、オブッコとよぶ人形が背負われて登場する。藁人形に顔を描いて白衣を着せ、守り刀を負わせたもので、鏡餅を見せたあと、汁掛け飯を食べさせる。

同じ北区滝沢のおくないでは、林慶寺の本堂内で参加者が高盛飯を食べる平治まつり、本堂前で猪に見立てた草枝を弓矢で射るシシウチの

写真１・２　杭全神社の御田植神事（2017年４月）

写真３　懐山のおくない・ネンネコー（2014年１月）

写真４　滝沢のシートー祭り（2014年１月）

後、堂内の本尊前でシートーまつりが行われる。小祢宜とよばれる世襲の神役が、着物の襟首に人形を差し込む。ネンネコサマとよばれ、杓子を古布でくるんでいる。その前にあやす役がふたり座り、ひとりずつ肩から伸ばした長い襷に足先を掛け、円を描くように足を３回廻してドスンと畳の上に落とす。それを見た一同が大声で笑うが、その声が大きいほど、その年は幸せになるという（写真４）。

牧之原市蛭ケ谷の田遊びは、蛭児神社の境内で大きな篝火を燃やし、その前で牛引きや田植えなどの農作業の所作や太刀や長刀をもって踊る太刀振りなどの芸能が奉納される。神役は袴姿で、紙垂をたくさんつけた綾笠をかぶっているため表情は見えない。

ここでは、ほた（榾）人形が登場する。榾は木切れを意味する語で、杉の枝葉の束を人形に見立て、長い綱の端に結んでいる。演目の最初のほた引きでは、多くの若衆たちが綱を持って大きな輪を作り、中央に立って唱え言をする神役の周囲を右へ回り、神役の動きに合わせて中央に固まってもみ合う。祭りの場に、稲に宿る精霊（稲霊）を降ろす儀礼だと考えられている。

人形はその後、田植の場面で子守に背負われて登場する。背中の上に見える頭の部分には白い布を巻いている。昼飯持ちの孕女や早乙女３人も登場し、早苗に見立てた杉葉を肩ごしに撒く（写真５）。その次の稲刈りですべての演目が終わると、人形は社殿の横に生えているソメイヨシノの木の幹に縛り付けられ、翌年まで放置される（写真６）。桜の木と田の神との関係を指摘する見方もあるが、ソメイヨシノは明治以降に広がった樹木のため、それ以前の様子は伝わっていない。

人間の赤ん坊のように背負われる以外に、抱っこされて登場する人形もある。

写真７　財賀寺のお田植祭（2005年１月）

愛知県豊川市の財賀寺のお田植え祭は、本堂内に置いた大太鼓の周りで農作業を演じ、途中で仮面を付けた牛も登場する。田植が終わると、昼飯持ちが赤飯を入れたお櫃を運んで現れ、続いて子守役がオコゾウサマを抱いて登場する。「シイコしよ、抱っこしよ」と参拝者に向かって小便をかける所作をする。男児の木偶人形で、このオコゾウサマを抱かせてもらうと子どもを妊娠すると伝えられている（写真７）。また新しい白襦袢を事前に預けて人形に着てもらい、祭りの後にその襦袢を自分の赤ん坊に着せると、その子は丈夫に育つと言われている。静岡県掛川

写真５・６　蛭ケ谷の田遊び・田植　ほた人形（2014年２月）

写真８　平尾のおんだ（2011年１月）

市西大淵の三熊野神社や高知県室戸市吉良川町の御田八幡宮でも、人形を抱くと子どもを授かるという伝承がある。

子授けや子育て以外にも、病気平癒を祈願する人形がある。奈良県宇陀市大宇陀平尾の水分神社では、１月18日の夜に境内の舞台で御田が行われる。田植の演目が終わると、抱きかかえられて人形が登場する。若宮と呼ばれる黒い尉面を着けた藁人形で、全身に紙縒りが括り付けられている（写真８）。舞台の上に寝かせると、参拝者たちが順番に並んで、自分や家族の身体の調子が悪い箇所の紙縒りを貰って帰り、それで患部をさすると、症状がよくなるという。人形が悪いものを取り去る機能を負っている。

稲霊を象徴する人形もある。東京都板橋区の徳丸と赤塚の田遊びでは、どちらも本殿前にもがりとよぶ舞台を設け、中央に置いた大太鼓の周りで町歩調べと田打ちから順に、農作業を演じる。

徳丸では、田植の後に、早乙女の男児を大太鼓の上に載せ、大人たちが高く差し上げる胴上げを行う。そのあと太郎次とやすめの男女とともに、笊に載せたヨネボウとよぶ藁人形（写真９）が呼び込まれ、舞台正面に置かれる。演目は稲刈りへと進み、最後に大太鼓の上に田遊びで使った用具類を高く積み上げて一番上にヨネボウを載せる（写真10）。稲むら積みとよぶ演目からも、稲の稔りを表している。前述の浜松市懐山のおくないでも、稲むら積みでは、大太鼓に乗った男性が囃しに合わせて立ち上がり、手にした杵で天井を突く所作をする。

赤塚でも田植の前に早乙女が差し上げられ、ヨネボウが運び込まれる。こちらは藁人形を２体作って縄で縛ったものである（写真11）。このとき太郎次とやすめも登場する。どちらの田遊びでも二人は仲睦まじく抱擁する。稲の生育に人間の妊娠をなぞらえている。

御田植祭りでは、演目の途中で頭上に食事を載せて運ぶ昼飯持ち（小昼持ち・間食持ち）が登場する所が多い。女装した人物で、お腹が大きい妊娠した姿が共通している。徳丸と赤塚のやすめも妊娠した姿で現れ、そのときに人形も登場する。

さらに、奈良県川西町保田の六県神社のように、昼飯持ちがお腹に入れた太鼓を取り出してポンとたたき、赤ん坊が産まれたと喜ぶ出産の所作を演じる所もある。

静岡県藤枝市・滝沢八坂神社の田遊びでは、田植の後に孕早乙女が登場し、舞台中央に敷かれた莚に二股の木偶人形を産み落とす。次い

写真９・10　徳丸の田遊び・ヨネボウ　稲むら積み（2008年２月）

写真11　赤塚の田遊び・ヨネボウ（2009年２月）

写真12　滝沢八坂神社の田遊び（2015年２月）

で登場した農夫が人形を見つけ、両手で高々と上げて喜び、大事に抱いて退場する（写真12）。この人形はタロッコとよばれており、太郎からきているのだろう。静岡県内で出産の場面を伴う人形はここだけだが、九州にも見られる。

鹿児島県薩摩川内市では、３月初旬の春祭りで田打ちが演じられる。高江町・南方（みなみかた）神社の太郎太郎踊りは、踊りというより農耕劇で、小学生たちが境内を田に見立てて木鍬で耕した後、テチョ（父親）とオンジョ（爺）、太郎（息子）が登場してやり取りがあり、牛も現れて暴れまわる。この牛は、籾米２升を入れた袋を股間に吊している。その後、いったん引っ込んだ太郎役が女性の着物をかぶってヨメジョ（嫁女）として再登場し、赤ん坊を産み落とす（写真13）。長さ約20センチメートルの米粒型の石で、テチョがそれを取り上げて大喜びし、米粉を溶かした水で石を白く塗ってヨネマツジョと名付ける。参詣者の顔にも白く塗ってまわることもあるという。その後、神前に供えた玄米を参拝者に配る。

同日午後に行われる久見町・諏訪神社では、次郎次郎踊りとよんで次郎とテチョ、カカア（母

写真13　高江町の太郎太郎踊り（2020年３月）

写真14　水引町の次郎次郎踊り（2020年３月）

親）が登場する。調査時は雨天のためカカアが産んだのは代わりの人形だったが、こちらは本物の赤ん坊が登場する。

同市水引町・射勝（いすぐれ）神社でも、次郎次郎踊りとして無言劇が演じられる。子どもたちが枝葉を持って虫送りをした後、白手拭で覆面をしたテチョが現れて、木鍬を使った田打ちや暴れ牛をなだめて代掻きをする。さらにテチョは「トッゴロ」と呼ぶ火のついた丸太をかついできて、害虫に見立てた見物客を追い回す。ひとしきり追い回した後、頭上に長方形の箱（モロブタ）を載せたヨメジョが登場し、テチョと抱き合うと赤ん坊を産み落とす。赤ん坊は籾米が入った袋で、テチョが掲げて大喜びする（写真14）。最後にモロブタに入れた籾と落花生を見物客に撒いて、儀礼が終わる。ほかにも大分県国東市安岐町の諸田山（もろたさん）神社や同市国見町の武多都（たけたづ）神社でも出産の場面がある。

全国的には200か所以上で御田植祭が行われており、そのうち人形が登場するのは30か所ほどである。それぞれの土地で特徴的なものもあるが、遠く離れているにもかかわらず共通する要素も見られる。それは米の栽培と生長の過程を、人間の出産と成長になぞらえていることである。人形は人間の赤ん坊であり、本来は目に見えない稲霊をも象徴している。稲を栽培して育てることは、子どもを産んで育てていくことと同じぐらい重要なことなのである。

［参考文献］

新井恒易著『農と田遊びの研究』（上下巻、1981年）

野本寛一著『稲作民俗文化論』（1998年）

関西大学文学部教授

レガリア「大刀契」について

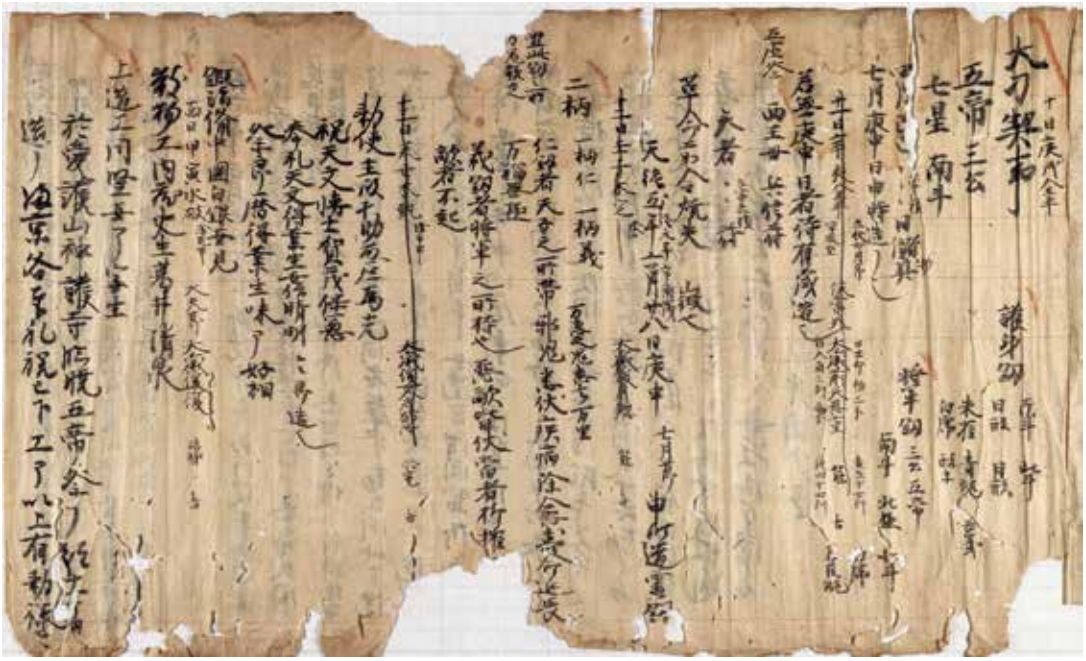
三　好　順　子

「大刀契（だいとけい）」とは、神器に準ずる皇位のレガリア（宝器）である。鎌倉時代の事典『塵袋（ちりぶくろ）』によると、大刀には２本の霊剣が含まれ、百済伝来の伝承をもち、契は魚符であり、銘に「発兵符某」（某は名前）などがあると記されている。大刀契は唐櫃に収められ、神器とともに内裏の温明殿に安置された。皇位継承時に大刀契が授受されたことが確認できるのは、『小右記』長和５年正月丁卯条が引く淳和天皇の譲位記事（天長10年）が最初である。

内裏火災で焼損の大刀契鋳造記事として、『中右記』（嘉保元年11月２日条裏書）に、蔵人藤原信経私記を引用し、安倍晴明の談として「去天徳内裏焼亡之日、皆悉焼損、晴明為二天文得業生一之時、奉二宣旨一進二勘文一所レ令レ作也、…」と、詳細な記事が記されている。山下克明氏は若杉家文書の陰陽道関係史料「大刀契事」【図１】が、応和元年（961）の晴明らの霊剣鋳造に関わる未見史料であると紹介した上で、『中右記』裏書記事との比較検討しながら、次のように述べている（註１）。

①百済国より献ぜられたとの伝を持つ護身剣・将軍剣（破敵剣）の２霊剣は、天徳の焼損後に五帝祭の祝（ほうり）を勤めた賀茂保憲を責任者として鋳造され、その後長徳３年までの間に再度焼損し、晴明は再び鋳造を主張した。②晴明が自らの功を天徳度に遡らせ、応和元年の鋳造に関する日時や五帝祭々官・鋳造工人の歴名を記した「雑事文書」（「大刀契事」）をその証拠とし、累代の重書として子孫に相伝した。③日月や北斗・四神等の図様を持つ護身剣・将軍剣の思想的源流は中国にあり、北斗七星には強力な軍事的意味がある。日月などの図様にも破敵の霊力が認められ、剣に星文を刻むことにより、兵刃や災害を免れる呪刀・護符としての意味をもつ。

図１には、護身剣（南斗・北斗・日形・月形・朱雀・青龍・玄武・白虎形等）・将軍剣（三公五帝南斗…）と形状なども記され、これらは『中右記』の焼損記事（一柄（護身剣）；左方ニ符形纔（わずか）見、打界也、左鋒ニ雲形纔残…、一柄（将軍剣）；峯ニ有銘、文云…北斗・左青龍・右白虎・後玄…）や『塵袋』の記事と類似する。



【図１】若杉家文書「大刀契事」（『反閇作法并事例』）（京都府立京都学・歴彩館、京の記憶アーカイブ）

星雲・竜や日月・四神などを刻んだ古代刀剣には、四天王寺所蔵の「七星剣」「丙子椒林剣」【図２】、法隆寺所蔵の「七星剣」があり、いずれも百済伝来の所伝を有し、『中右記』等に記された二柄の霊剣との類似が指摘されてきた。

しかし、霊剣の中の将軍剣について、将軍や遣唐使が天子から委ねられた証の節刀（将軍剣）に百済の権威を借りる必要がなく、百済からの献上伝承は有り得ないとし、火災で破損のたびに陰陽師が関与し、百済伝来説を含め、陰陽師による脚色や改変を想定すべきとの説もある(註2)。大刀契は平安中頃から焼失・改鋳に陰陽師が関わる所となり、唐櫃の中は秘蔵として、南北朝頃まで存在したという。

天皇の行幸に随伴した大刀契は、皇位継承のレガリアとして起源に諸説あり、①持統天皇即位時（百済王のレガリア大刀契を天智天皇に献上）、②平城天皇即位時（桓武朝に百済王氏より献上）、③嵯峨天皇譲位時（儀礼の唐風化、『儀式』譲国儀の成立）などが代表とされる。

ところで、６世紀後半の円墳である藤ノ木古墳の石棺内から発見（1988年）された大刀には、金銅製の双魚佩（そうぎょはい）をともなう。被葬者である貴人の装束として副えられた大刀と魚佩は、帰属する身分の象徴として、埋葬儀礼用に特別に誂えたものという(註3)。伊勢神宮の神宝として20年毎の遷宮時に献納された玉纏太刀（たままきのたち）【図３】にも魚佩が付属する。古墳に副葬され、神社に献納された大刀と魚佩は貴人の身分を表す装束であり、同様の大刀と魚佩は皇室にも伝えられていたであろう。皇室所伝の大刀と魚佩が何らかの契機で皇位継承の際のレガリアに転化したと考えられる。

随身符（符契）の起源は前漢時代といわれ、古代日本では関契（かんけい）を三関国（さんげんこく）（鈴鹿・愛発（あらち）・不破の関（所）があった国）に与えている。『小右記』に、譲位式の伝国璽（でんこくじ）が大刀契のことと記されている。霊剣である護身剣（天子所持）・将軍剣（節刀）と関契（魚符）等をさし、天皇権力を構成するものである。皇室には、レガリアとして伝世した剣璽（鏡剣）が存在する。その上に、大刀契が加えられたのは、第二の宝器として、天皇の権力を象徴する、新たなレガリアの必要性が生じたからと考えられる。皇位の正統性を象徴するレガリアとして、霊力・呪力を持つ大刀と、天皇の権力下にある契（関契）が加えられた。剣に星文を刻むことにより、全宇宙の霊力を象徴し、皇位の神聖性を高める要素があった。従来の宝器である剣璽を否定せず、中国に源流のある北斗・四神等の図様をもつ護身剣・将軍剣と関契等で構成された大刀契をレガリアとして付け加えたのである。

註

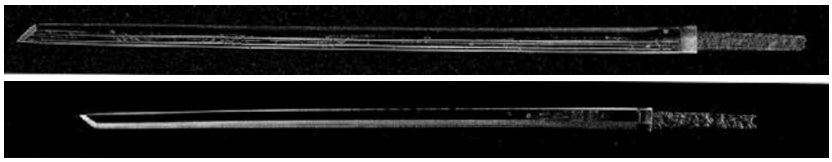
(1)山下克明「陰陽道と護身剣・破敵剣」（『平安時代の宗教文化と陰陽道』岩田書院、1996年）

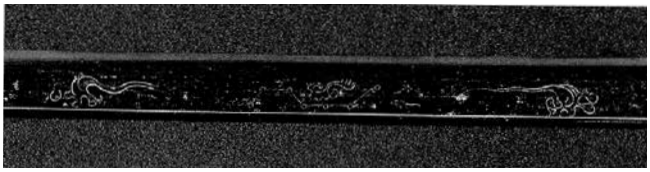
(2)鈴木拓也「将軍・遣唐使と節刀」（『続日本紀と古代社会』塙書房、2014年）

(3)『藤ノ木古墳の全貌』（編者 橿原考古学研究所、学生社、1993年）

関西大学文学研究科博士課程後期課程

【図２】
上「七星剣」・下「丙子椒林剣」
『聖徳太子信仰の美術』
（四天王寺開創1400年記念出版）
（監修、大阪市立美術館）
部分；左「七星剣」・右「丙子椒林剣」





【図３】「太刀」『神宮遷宮記』（第７巻 図録篇）
175.85 J2* 7
（寛喜２年（1230）正遷宮神宝絵巻物）

これからの「公共」について
―人文系私設図書館 Lucha Libro の活動から―

青　木　真　兵

2016年４月、私たちは兵庫県西宮市から奈良県東吉野村に移り住みました。移り住んですぐに自宅を私設図書館（人文系私設図書館 Lucha Libro、以下ルチャ・リブロ）として開き、現在も活動を続けています（写真１）。まず、2012年に出版された『民俗学の可能性を拓く「野の学問」とアカデミズム』[1)] で語られている、博物館の現状と課題について共有しておきます。

写真１：橋を渡って正面には史跡があり、史跡を逸れて林を抜けると当館。

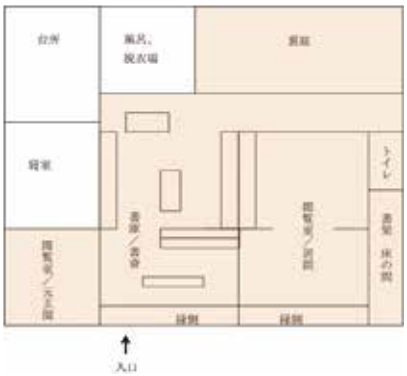
現代の地域博物館は、岐路に立っている。国内の多くの館園が予算削減や人員削減などを経験していて、博物館の整理統合や指定管理者への運営委託など、公立博物館の存続そのものが当然のように議論されるようになった。“コレクションは市民の財産だ”とか、“博物館は生涯学習の基盤だ”など、地域博物館の存在意義を声高に訴えても、その主張は必ずしも市民の心に届いておらず、対費用効果や入館者数に偏重した事業評価などの議論のなかで雲散霧消してしまうのが現状である。（加藤幸治、141ページ）

加藤氏が述べるように、「博物館の存在意義」が社会全体に共有されていないと感じる方は多いのではないでしょうか。私もその一人です。しかしその価値が社会全体に共有されていないと感じるのは、博物館に限ったことではありません。現代では、文化、教育といった、結果が出るまでの変化が緩やかだったり、そもそも数値化とは馴染まない事柄に対しても、「対費用効果や入館者数」によって成果をカウントしている傾向が強化されています。ここでは、人口約1700人（2021年現在）の山村に住み、図書館活動を行いながら考えた「公共とは何か」について報告します。

ルチャ・リブロの開館日は、月に10日前後です。主に月曜日と火曜日が開館日で、また隔週で日曜日を開けていますが、毎月の詳しい開館日などの最新情報はホームページで発信しています。また12月中旬から３月中旬までは冬季休館としており、年間の開館日は90日程度となっています。来館して本を読んでいただくだけの利用は無料です。本を借りる場合には会員カードを作成料500円で作っていただきます。遠方の方でもカードを作成いただければ、貸出は可能としています。現在がコロナ禍ということもあり、貸出は２ヶ月、１人３冊までとなっています。また本の貸出は「サービス」としてではなく、「おすそわけ」という意識で行っています。トークイベントなどを開催することもあり、その場合は有料です。来館者は村に移住者してきた方だけでなく、奈良県内外などから、年間500人程度の方にご来館いただきました。その中で計200件の貸出があり、会員数は2021年７月現在200名程度となっています。（写真２）

写真２：館内書庫の様子。真ん中にいるのは当館館長のかぼす。

先述のとおり、ルチャ・リブロは自宅を図書館として開いて運営しています。自宅という「私有」の空間と図書館という「共有」の空間が混ざり合っているともいうことができますし、どう呼称するかによって家の役割が変わるということでもあります。図書館を閉めているときは完全に自宅なので、閲覧室で食事をとったり、



間取り図：色をつけているところが共有している空間。書庫は書斎、閲覧室は居間や元玄関でもある。この空間は開館／閉館を通じて、共有／私有が切り替わる。

写真３：当館閲覧室の様子。ここに本を持ってきてくつろいでもらっている。

ゴロゴロしたり、原稿を書くこともあります。一方、図書館を開けているときは、図に示したように自宅の三分の二程度を開放しているため、私有空間は共有空間に変わります（間取り図）。店舗や神社仏閣でも住居部分（私有空間）と店舗部分（共有空間）が隣接している場合がありますが、ルチャ・リブロの場合は二つの空間が干渉し合っています。この生活自体を「図書館」と呼んでいます（写真３）。

さて、山村で暮していると、公共への考え方が都市とは異なることに気が付きます。東吉野村に越す前までは神戸市や西宮市に住んでいた私たちも、公共とは「行政の管理下にあること」を意味していると思っていました。しかし東吉野村に住んでみると、公共への考え方が変わってきました。例えば、地域の行事として共同墓地の清掃活動や周辺道路や公園のゴミ拾い、近所の馬頭観音祭の準備などがあります。地域の方々がそれらを担うことが、公共につながっている。人口が少ないことも相まって、公共と私たちが地続きなのが分かります。

この背景には、都市と山村の成り立ちの違いがあると思っています。基本的に都市は人が住むために設計されていて、あらゆるものが交換可能です。あらゆるものが交換可能ということは、何でも買うことができるということです。つまり都市ではすべてが商品になっています。一方、山村ではどんなにお金を払っても交換できないものがあります。それが代々受け継いできた家や土地です。これらの先祖から受け継いできたものは、商品ではありません。

2000年代後半に始まる橋下徹大阪府知事（後に大阪市長）時代の新自由主義的政策は、社会を都市的価値観に偏らせるものでした。そしてこれらの政策が支持された背景には、公共財が自分たちのものではなく、「誰かのもの」だと府民や市民が思っていたことがあるのだと思います。「誰かのもの」の価値を測るためには、最も万能な尺度は商品としての価値です。だから、商品としての価値がなければなくしても良いという、乱暴な論理がまかり通るのです。しかし商品として価値があるかどうかで、公共財の価値を判断してしまうことはとても危険です。

そういう意味で、私たちの図書館活動は「公共」を問い直す試みです。問題意識の根底には、私たちはどうすれば公共を自分ごととして扱うことができるのか、というものがあります。そのためには「公共」のなかに、商品としての価値だけではなく、「交換できない価値」を含むことが必要なのではないでしょうか。山村の場合、それは「先祖代々受け継いできた」というものになるのですが、あまりに歴史と文化財が結びつき過ぎることによって、排他性を含んだナショナリズムに利用されてしまう危険性もあります。

山村で自宅を開いて図書館活動を行うことは、現代が一つの価値観に偏り過ぎているのではないか、という示唆を私に与えてくれました。公共を「誰かのもの」だと思わずに、自分もその担い手だと思うこと。そういう人が一人でも多く増えることが、博物館の存在意義を社会全体に共有できる唯一の道なのではないかと思っています。

［注］

１）岩本通弥、菅豊、中村淳編著『民俗学の可能性を拓く「野の学問」とアカデミズム』（青弓社、2012）

人文系私設図書館Lucha Libroキュレーター、関西大学非常勤講師

九鬼隆一の「地方博物館設立ノ必要ナル理由」

山　口　卓　也

明治維新政府の文部官僚、貴族院議員、男爵で、文化財保護や博物館開設に尽力した九鬼隆一（1850～1931）は、1900（明治33）年、帝国博物館総長を辞した直後、出身地で自ら会長を務める兵庫県有馬郡同郷人雑誌「有馬會雑誌」第五号に、「地方博物館設立ノ必要ナル理由」を発表し、のちに九鬼の所蔵美術品を展示する私立有馬會三田博物館を開設する。この論説は、国立の中央博物館と対になるべき地方博物館の担うべき重要な機能と必要性を指摘したものであるが、出身地の兵庫県有馬郡三田町に、実際に私立地方博物館を開設したことは、日本の博物館史上ほとんど注目されてこなかった（NPO法人歴史文化ネットワークさんだ2014）。筆者は、先に関西大学博物館の本山コレクションの形成した大阪毎日新聞社長本山彦一と九鬼の交流と慶應人脈、私立有馬會三田博物館について論究した（山口2020）が、九鬼の論説は重要と考えるので、本稿で「地方博物館設立ノ必要ナル理由」の全文を掲載する。

1900（明治33）年の九鬼の論説の趣旨は６節で、第一に「歴史上必要ナル事」、第二に「地方産業上必要ナル事」、第三に「地方遺物ノ散佚ヲ防ク事」、第四に「地方精神ヲ維持スル事」、第五に「地方遊覧ノ資タル事」、第六に「國家博物館ト連絡スル事」が掲げられる。地方博物館にとって、第一に各地の独自の文化や歴史的遺物の保存・公開の必要があること、第二に地方の産業のため、近代化が進む中でも地方色を維持する展示場所・博物館が必要であること、第三に地方遺物の散逸防止のため、神社・寺院・旧家等からの名品の数々を収蔵・公開する必要があること、第四に地方精神を維持し、地方独自の精神や特質、先人偉人の顕彰や、遺物の保管・公開する必要があること、第五に観光資源として地方博物館で観光客の知識と興味歓楽に供すること、第六に中央博物館と連携し、展示資料の性質や大きさを勘案して配置を調整する必要があって、中央博物館と小さな地方博物館が相まって役割分担してこそ日本の文物（文化財）を広く開示できることを述べている。一瞥して、地域の文化財の散逸を防いで保存保護し、さらに地方色・地方精神の特質や先人顕彰、観光資源、地方産業振興などが取り上げられており、現在の自治体立の地域博物館に通底した役割と機能が含まれていることがわかる。さらには、地方博物館と中央の国立博物館が収蔵や展示などで役割分担してネットワークすることによる機能重層化も期待するものとなっており、九鬼の地方博物館設立の論説は、ようやく国の博物館整備が進みつつあった明治中期にあって、きわめて先進的なものであった。明治時代は博覧会、勧業博覧会の時代でもあり、明治時代後半には公設の地方産業勧業展示館園・物産館の設置も進むが、地方博物館は、やや遅れて概念提示が行われたことになる。

第１図　九鬼隆一　　第２図　有馬會雜誌第５号　1900年

九鬼隆一は、中央博物館に対置・連携する地方博物館として、1914（大正３）年、私立有馬會を母体に、図書館に続いて大正記念三田博物館を設立する。大正天皇の即位を記念した命名であったという。建物は、旧有馬郡役所を改築した２階建て洋風造りで、九鬼が集めた伊藤若冲、雪舟らの日本画など絵画129点、仏像14点、木札１点、古壺186点、平鉢18点、その他111点、約500点が展示され、入館料は20銭であったという。内容的に三田博物館は、九鬼の「個人美

術館」であったことがわかる（三田博物館1915～17）。1900年の提言に沿う考古学や地域史、産業などの展示があったかは窺えない。あくまで九鬼の個人コレクションを「開陳」する構成だったようだが、地元有志団体の「地方博物館」である大正記念三田博物館の展示内容が、実際に三田という地域の歴史や美術にどこまで根差していたかは、今後研究の余地がある。有料であったことと、九鬼個人所有の美術品が中心であったことなどから、かならずしも入館者は多くなかったらしい。このような三田博物館の内容は、やや不満が残ったような状況で帝国博物館総長を辞した直後に発表された地方博物館設立構想との間に大きな落差があって、九鬼の個人的な美術嗜好に回帰したものである可能性が高い点を指摘しておきたい。

【参考文献】

三田博物館　1915～17 『三田博物館出陳図録』３巻　抄本１巻

NPO 法人歴史文化財ネットワークさんだ　2014『さんだ人物誌』

山口卓也　2020 「大正記念三田博物館と九鬼隆一」『関西大学なにわ大阪研究』第２号

論説　地方博物舘設立ノ必要ナル理由

九鬼男爵　口授　　藤谷　説　筆記

第一　歴史上必要ナル事

本邦ハ　皇統一系ノ國躰ニシテ歴史上貴重スヘキ事蹟頗ル多シ従テ其遺物ニ富メル　亦各國ニ比類ナシ然シテ歴世　皇恩ノ各地方ニ沾被スルヤ各自其特色ニ依リテ以テ全國ノ文化ヲ發揚セシナリ則チ九州ニアリテハ古代外交ノ事迹ヲ存留シ紀州高野山ニ於テハ空海時代ノ遺物ヲ徴スルニ足リ藝州厳島ニ於テハ平氏ノ興隆ヲ想見スヘク河内ニ於テハ南朝ノ遺風ヲ尋ヌヘク陸中ノ平泉ニ於テハ藤原氏ノ文物ヲ考證スヘシ鎌倉モ亦覇府剏建ノ土地トシテ百五十年間ノ文明ヲ保チ自ラ歴史上別種特色ヲ有ス此等歴史上ノ遺物ヲ湮滅セシメス其遺物ニヨリテ事蹟ヲ開示スルヲ得ルハ我國ノ文化ヲ發揚スル所以ナリ啻ニ奈良京都東京カ皇都ノ文質彬々ヲ知ルノミニアラサルナリ

第二　地方産業上必要ナル事

地方ニ於テハ其必要ト境遇ニヨリ各特殊ノ産業ヲ顕シ其製作風趣大ニ見ルヘキモノアリ将来ニアリテモ猶獨特ノ趣致ニヨリテ之ヲ發達セシムルノ必要アリ然ルニ維新以来全國ノ趨勢主トシテ都門ニ集注シ各地ノ物産ハ自ラ一定ノ儀型ニ入ラントスルハ一面ニ於テ惜ムヘキモノトス是レ必竟地方従来ノ趣致ヲ涵養スヘキ淵原ナキニ原因スルノミ今日地方ノ工業ニ従事スル者ハ尤参考品標本等ニ缺乏ヲ感シ陳腐ノ形式ヲ趁フニアラサレハ都下ノ雑駁ナル流行ニ伴ハントスルニ過キス故ニ地方博物舘ヲ設ケ其特色ヲ示スヘキ参考品標本ヲ陳列シ以テ製作家ノ資料ニ供スルハ地方ノ一大要務ニ属セリ

第三　地方遺物ノ散佚ヲ防ク事

地方ノ神社寺院舊家豪族等ノ名品ノ珍襲セラルルモノ少カラスト雖其保存法ニ於テ欠点ナキニアラス且玉石混淆シ希代ノ大作ヲシテ往々湮滅散逸セシムルモノ多シ古代美術品ノ如キハ其保存法ニ於テ頗ル注意ヲ要スヘキモノナリ故ニ適當ノ舘厦ヲ作リ之ヲ収蔵シ常ニ修理ニ注意シ併セテ衆庶ノ観覧ニ供スルハ徒ニ筐底ニ秘シテ蠢鼠ノ害ニ遭フニ比シテ其世溢タル果シテ如何ソヤ

第四　地方精神ヲ維持スル事

全國交通ノ便利ノ開クルト共ニ一種危険ナル現象ハ中央集點ニ支配サレ地方観念ノ消磨スル事實是ナリ世界的ノ普通性ヲ傳播スルハ日新ノ世運ニ於テ固ヨリ必要ナリト雖此レト同時ニ各地方ノ精神ヲ鞏固ニシ郡村相頼リ郷黨相親シミ地方其モノノ特質ヲ失ハシメザルハ是亦必要ナリ而シテ地方観念ノ根據ハ能ク偉人傑士ノ成蹟ヲ其遺物等ニヨリテ表明皎著ニシ民心ノ因リテ繫ル所ヲ示スニ如クハナシ是レ地方博物舘ノ今日ニ欠クヘカラサル所以也

第五　地方遊覧ノ資タル事

地方山川ノ名勝ハ大ニ遊覧ノ資タリト雖其地ニ美観ヲ添ヘ可キ遺物古跡アルハ又幾層ノ行楽ヲ促スノ有力ナル資料タリ若シ地方博物舘ノ設立ヲ見ルノ運ニ至ラハ行楽者ヲシテ皆之レカ為メ學問ト快楽トヲ兼ネテ日本帝國文化ノ主義ヲ一層深ク感セシムルアラン

第六　國家博物舘ト連絡スル事

中央博物舘ヲ東京京都奈良ニ設ケラレ本邦古代ノ歴史美術ヲ窺ウ便利アリト雖巨大ノ製作物ハ固ヨリ之ヲ中央ニ移轉スベキニアラス又許多ノ物品ハ到底収容スルノ方法ナシ而シテ歴史的ノ物品ハ其存在ノ地方ヲ離レテ却テ價値ヲ減スル恐レアリ故ニ中央博物舘ノ外各地方ニ博物舘ヲ設立シ大小相須チテ以テ我國ノ文物ヲ開示スルハ尤必要ナリトス

※一部旧字や送り仮名などを改変

第３図　九鬼隆一「論説 地方博物舘設立ノ必要ナル理由」

有馬會雑誌　第五號　明治三十三年五月廿九日発行
発行所　有馬會事務所　東京市小石川區白山御殿町一二七
藤谷説方
編輯兼発行人　小田綱太郎　東京市麹町區土手三番町二十三番地

関西大学博物館学芸員

関西大学博物館所蔵蓑虫山人由来の土偶

山　下　大　輔

はじめに

蓑虫山人（みのむしさんじん）は、幕末から明治時代半ばに九州地方から東北地方までを旅した放浪の画人である。明治11～20（1878～1887）年には青森県に滞在し、弘前の平尾魯仙（ろせん）や下沢保躬（やすみ）を訪れ、津軽各地の知識人や文化人たちの紹介を受けたようである（青森県立郷土館 2008）。

さらに、蓑虫は平尾、あるいは下沢を通じて佐藤蔀（しとみ）に会い、頻繁に遺跡や考古遺物についての情報交換を行い、蒐集した遺物を展示紹介する「書画会」を開催した。

このように明治13～17年の間に訪れた先々での出来事が『山人写画』（絵日記青森編）に描かれており、さらに蓑虫が下北および津軽地方を歩き、そこで蒐集・見聞した遺物を描いた『陸奥全国神代石并古陶之図』には『山人写画』中の遺物スケッチが彩色して描かれている（青森県立郷土館 2008）。また、近年、三沢市先人記念館に保管される廣澤安任（やすとう）関連資料に蓑虫の描いた土偶図があることが判明している（太田原 2021）。

蓑虫山人と本山コレクション

蓑虫山人が青森県滞在中に蒐集した考古資料の中には、後に神田孝平が譲り受け、現在関西大学博物館に「本山コレクション」として所蔵されている資料が含まれる。これまでに、亀ヶ岡遺跡出土とされる蝙蝠形土偶（第２図a）や片口形土器などが、蓑虫山人由来の資料として確認されている（青森県立郷土館 2008、山口 2018）。

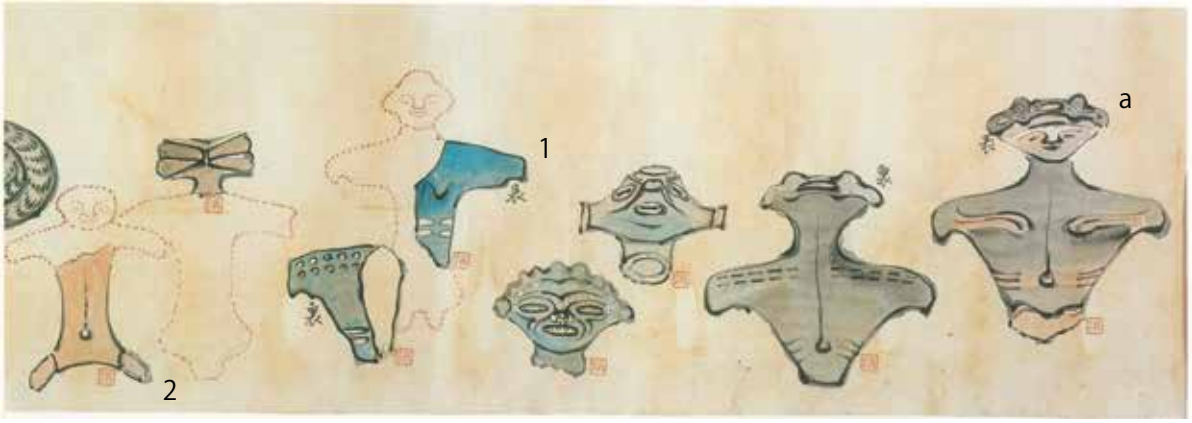
本山コレクションは、元大阪毎日新聞社社長の本山彦一が蒐集した考古資料からなる総数約２万点を数えるコレクションである。その中には、上述の神田孝平のコレクションやなにわの知の巨人といわれた木村兼葭堂旧蔵の資料も含まれ、2011年には国の登録有形文化財に登録された。

当館では2017年度から当コレクションの再整理・再調査を実施しており、その際に元は蓑虫山人が蒐集し、その後神田や本山の手を経て当館に収蔵されることとなったと考えられる土偶３点を確認したため、ここに報告する。

蓑虫山人由来の土偶

先にみたように、蓑虫山人は青森県内を行脚する中で蒐集した考古遺物を自ら描き記録している。その中には、形態等の類似度から当館所蔵の本山コレクション中にみられる資料と同一個体である可能性が高い資料が示されている。

第１図　本山コレクションの土偶実測図（S=1/3）・写真（縮尺任意）



第２図　陸奥全国神代石并古陶之図にみえる本山コレクションの土偶

以下、蓑虫が描いた図画と資料の実測図および写真を提示し､同一資料である可能性を検討する。

第１図１は、左胸・腹部から腕部が遺存する資料でそれ以外の部位は欠損する。腕部分は中実であるが、それ以外の胸部から腹部にかけては中空となる。外面には乳房が表現され、腹部には細沈線で肋骨様のモチーフが施され、腕部背面には竹管による円形の刺突文が二段にわたり施文される。その形態と文様の特徴から、第２図１と同一資料であると考えられる。

２は、上半身の胸部以下と脚部の付根がわずかに遺存する資料である。支柱となる粘土塊に薄い粘土を貼り付けて成形する。腹部が円形に突出し、そこから胸部にかけてペン先状の工具で縦位に押引状の刺突文が施される。やはりその形態と文様から第２図２として描かれた資料に相当するものと考えられる。

３は胸部から腹部にかけての部分が遺存し、頭部・両腕・両脚を欠く。首に近い部分に粘土塊により豆粒状の突起が貼り付けられており、あるいは乳房を表現したものとも考えられるが、同様の突起は背面にもみられるため、断定はできない。２の資料と同様に支柱となる舌状を呈する粘土塊に薄い粘土を貼り付けて成形する。第２図に示した『陸奥全国神代石并古陶之図』中には当該資料はみられないが、近年提示された廣澤安任関係資料の中にこれに該当すると思われる土偶が描かれている（太田原 2021 の資料３を参照）。

おわりに

関西大学博物館が所蔵する本山コレクションの中には、様々な来歴を有す資料が含まれている。蓑虫山人由来の青森県出土資料についても、神田孝平の手に渡った後に本山彦一の所蔵となり、現在当館が所蔵するにいたっている。蓑虫山人が残した図画に当館所蔵資料と同一と考えられるものがみられ、これまでにも亀ヶ岡遺跡出土とされる蝙蝠形土偶や片口形土器などが蓑虫山人旧蔵の資料であることが確認できている。

今回、当コレクションの再整理・再調査を行う中で、新たに蓑虫山人由来と考えられる土偶３点を確認し紹介した。当コレクションに含まれる考古資料の中には、残念ながら出土遺跡が不明なものやその来歴が確かでないものも含まれている。考古資料として出土遺物を評価する際には、遺跡と遺物を切り離して考えることはできず、遺物が出土した遺跡を特定することやその来歴を明らかにすることは必要不可欠な作業であるといえよう。今後も当コレクションの調査を継続的に実施し、個別資料の再評価を行っていく必要がある。

【参考文献】

青森県立郷土館　2008『蓑虫山人と青森　放浪の画家が描いた明治の青森』

太田原慶子　2021「蓑虫山人が夢みた博物館－資料「廣澤安任自筆草稿」を中心に－」『青森県立郷土館研究紀要』第45号

山口卓也　2018「蓑虫山人の片口形土器－本山コレクションと数寄者・好者－」『阡陵』No.77　関西大学博物館

【図の出典】

第１図：筆者実測・トレース・写真撮影

第２図：青森県立郷土館 2008『蓑虫山人と青森　放浪の画家が描いた明治の青森』7－15を一部改変

関西大学博物館学芸員

東洋民俗博物館の建築

西　田　貫　人

近鉄奈良線菖蒲（あやめ）池駅から500mほど進んだ先にある池畔の丘に約150平方メートルほどの小味な洋館が建っている。

この建物は、1928年に九十九（つくも）豊勝の収集した東洋、日本の歴史、芸術、考古、民俗などに関する資料を展示・保管する東洋民俗博物館である。

あやめ池遊園地と東洋民俗博物館

あやめ池遊園地は、戦前期に発達した大阪近郊の遊園地施設のひとつである。大阪電気軌道（後の近畿日本鉄道）によって、生駒山上遊園地とともに開設された。同じ頃、宝塚新温泉では、娯楽施設が刷新され、北大阪電鉄（現在の京阪電鉄）沿線では千里山花壇が開発されるなど、新たな施設の可能性が示されつつあった。菖蒲池の開発については、電車の開通当時から行われていた計画であり、約19万平方メートルの用地を買収しており、奈良線の沿線開発事業として、1926年に駅の北側に広がる菖蒲池周辺の約５万６千平方メートルの土地を利用して遊園地を開園した。大阪電気軌道は、この遊園地に花菖蒲園や演芸場、遊具を備えた小運動場、動物舎、花壇、屋外劇場などを設けた。その後も、旅客誘致施設の拡充を継続的に行なっており、開園した翌年の1927年に成田不動尊、料理旅館、市川右太衛門プロダクションの撮影所が設置された。博物館もこの拡充の一環として企画され、1928年５月に奈良線敷設の事故者慰霊を契機として交流があった九十九豊勝の収集資料を展示する東洋民俗博物館を建設した。

本館の外観

博物館の本館は、池を見下ろす丘陵地に建設された建物である。その構成は、エントランス

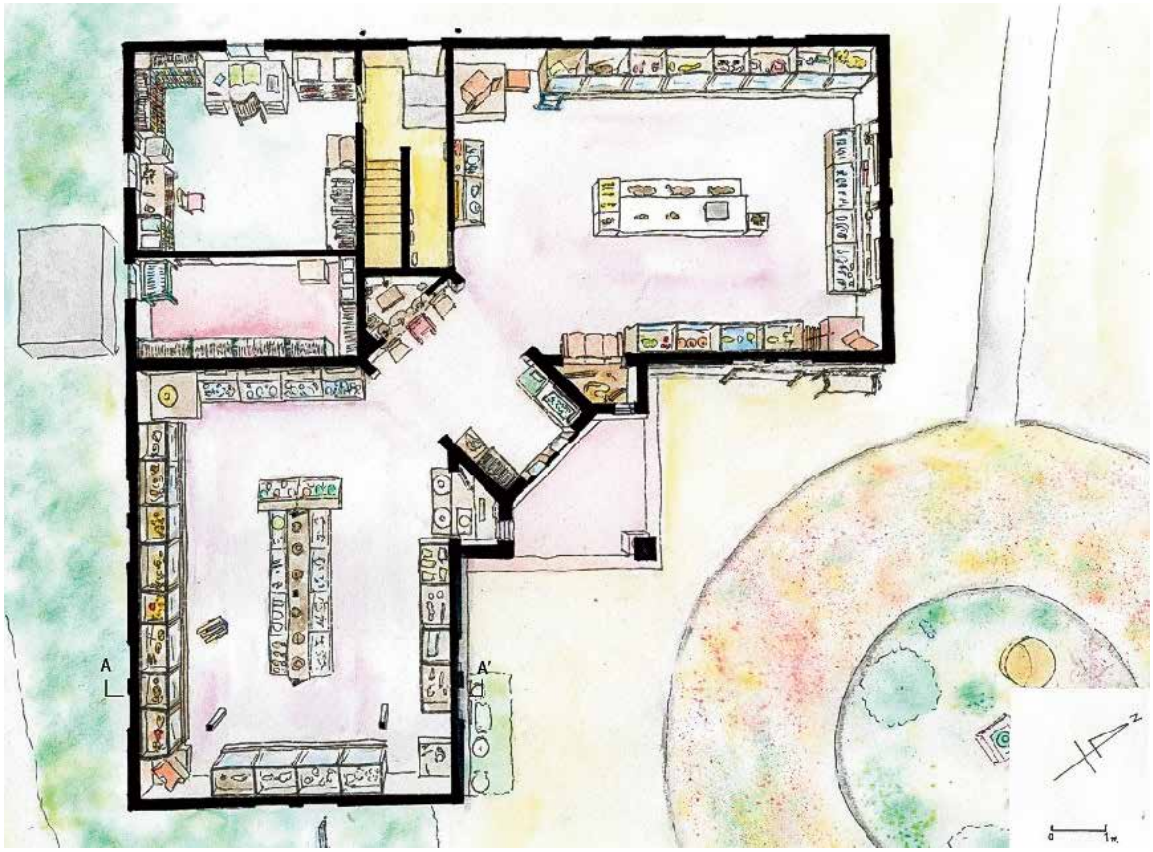


図１　平面図

や書斎といった部屋を中心にＬ字型に展示室が伸びており、左右対称となっている。また、エントランスには円柱や外壁の上部に付けられた帯状の装飾であるコーニスが施されているなど、ルネサンス様式の特徴がみられる。

このコーニスやエントランスの柱頭、窓の格子などの装飾には、三角形を連続して組み合わせたものや斜線を組み合わせたデザインが見られる。この幾何学模様、直線的・機能的なデザインは、1910年代から40年頃にかけて流行したアール・デコのモチーフであり、当時の流行を則っていたと考えられる。この三角形のデザインは、窓枠にも使われていたが、装飾の施されていない窓に取替られており、現在は玄関の上部の窓とエントランス内部に設けられた小空間の上部に取り付けたものが残っている。

外壁は、ドイツ壁と呼ばれるモルタル掃き付け仕上げとなっている。そして、腰壁にも荒い石が用いられており、凹凸による細かい陰影を生み出す味わい深いものとなっている。中央の玄関の両脇には、人物や太陽を模したギリシア風のステンドグラスがあしらわれており、直線的なデザインの外観の中で、アクセントとなっている。

屋根は、スレート屋根が葺かれている。竣工当初、天候によって開け閉めできる回転式の強化ガラスがはめられていたが、この強化ガラスの天井は1934年の室戸台風で壊れたため、現在の様相となった。

本館の内観

室内はシンプルな作りとなっている。しかし、室と室は装飾が施された石材のブロックによる、緩やかなアーチによって開放的につながっている。また、エントランスや展示室には小空間が設けられており、小さな空間に広がりをもたらす工夫がされている。

展示室内では、創立時の展示ケースが90年近く経った現在も使われており、建物に収蔵庫がないことから、展示型収蔵の方法が用いられている。そのような室内に資料は１万点近く展示され、非常に密度の濃い空間となっている。

東洋民俗博物館の今後について

東洋民俗博物館はその資料の貴重性だけでなく、建築物や展示方法といった点においても、文化価値のあるものであると考えられる。

しかし、役員の高齢化に伴う、後継者問題など、今後難しい局面を迎えているという。

そのような状況は、様々な場所で起こりうる問題であり、今後いかにその特徴や思想、技術や価値を後世に伝えるか改めて考える必要がある。

関西大学博物館学芸員

図２　A-A’断面図

◘ 博物館だより

◇2020年度関西大学博物館　開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	0	0	18	22	1	9	27	24	23	20	16	19	179
入館者数	0	0	32	82	444	73	178	236	273	112	135	340	1,905

◇2021年度春季企画展として、新型コロナウィルスの終息を願い、「疫病に立ち向かう—奪われしもの、生まれしもの—」と題して、当初の開催期間（４月１日から５月16日まで）を６月11日まで延長し、527人の来館者にお越し頂きました。

　また、対面形式で予定していたミュージアム講座はビデオ収録し、少人数での分散受講を11人の方にして頂きました。

◇新型コロナウィルス感染症拡大防止のため、今期も博物館実践実習研修会や春学期SPレコード演奏会など、毎年恒例の諸行事の開催を中止せざるをえませんでした。また、４月４日のスプリング・フェスティバル、５月16日の教育後援会総会のとりやめに伴い、学内見学を中止しました。安全対策のため、規模を縮小して新たに企画したキッズ・ミュージアム（８月４日「縄文時代の石斧を作ろう」、８月５日「拓本をとろう」）も、８月２日からの緊急事態宣言発出に伴い中止いたしました。

◇春学期授業は、当初は対面授業の予定でしたが、新型コロナウィルス感染症拡大の影響で、博物館実習については対面授業と遠隔講義（オンライン授業）を併用しながら実施しました。実習が多い博物館実習では、今年度も関西大学LMSシステムなどを活用して、実習風景のビデオ撮影を行い、オンデマンド配信するなどの対応を図りました。また、感染がある程度抑えられていた期間を利用して、学外見学を実施しました。

◇「北海道・北東北の縄文遺跡群」が、2021年７月27日にユネスコの諮問機関・イコモス（ICOMOS）により世界文化遺産に登録されました。関西大学博物館には、蓑虫山人、神田孝平、本山彦一らによる蒐集考古資料があり、「東北縄文文化発見と研究」としてのバトンリレーとなっています。世界文化遺産登録を祝して、これら「北海道・北東北の縄文遺跡群」関連資料を展示しています。

・・・編集後記・・・

　表紙の張り子の虎（10.5×34.6×31㎝）は、内藤湖南（本名虎次郎、1866～1934）の旧蔵品です。寅年生まれの内藤湖南は東洋史学者で、京都帝国大学教授をつとめました。退官後に京都府相楽郡瓶原村（現、木津川市加茂町）に恭仁山荘を営み思索の日々を送り、1934年（昭和９）に当山荘で生涯を終えました。1984年（昭和59）、関西大学は湖南・伯健（本名乾吉、1899～1978）の旧蔵書約３万冊と恭仁山荘を内藤家から譲り受けました。古来より虎は霊獣とされ、それをかたどった張り子の虎は、魔除けの縁起物として飾られました。春季企画展「疫病に立ち向かう—奪われしもの、生まれしもの—」にて、新型コロナウィルスの終息を願い厳選してお披露目しました。

関西大学博物館彙報　No. 83　2021年９月30日　発行
関西大学博物館　　編集